

白馬村人口ビジョン(案)

<第 3 期>

1. 人口ビジョンの概要

(1) 人口ビジョンの位置づけ

白馬村人口ビジョンは、本村における人口の現状を分析し、人口に関する村民の認識を共有したうえで、今後目指すべき将来の方向性と人口の将来展望を提示するものです。

(2) 人口ビジョンの対象期間

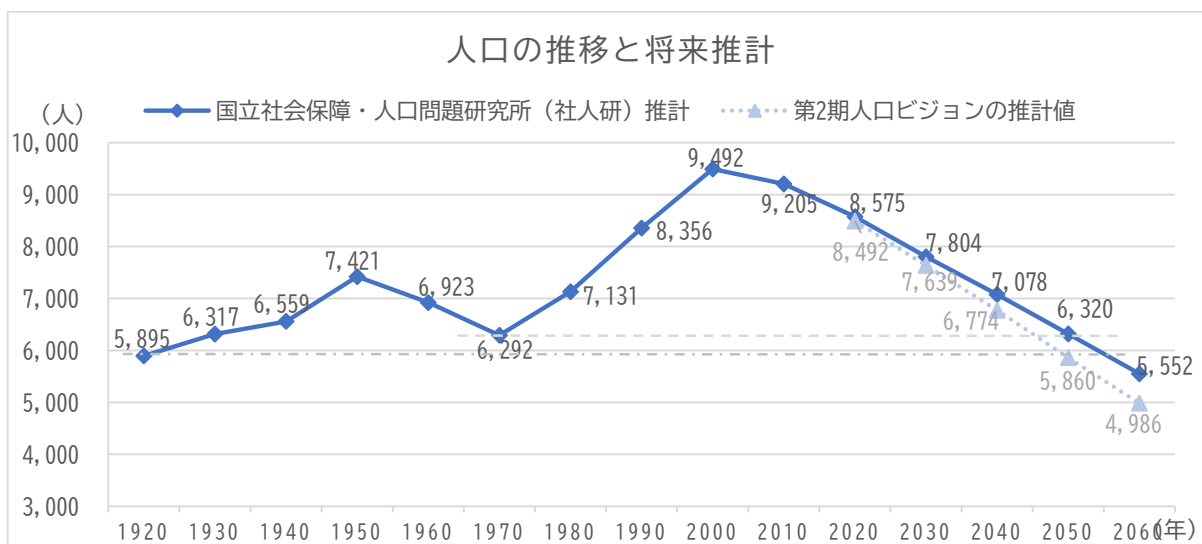
白馬村人口ビジョンの対象期間は、国の長期ビジョンを踏まえ、2070 年(令和 52 年)までとし、長期的な視野に基づいた展望を示します。

2. 人口の現状分析と将来推計

(1) 人口の動向分析

ア. 総人口の推移と将来推計

1950 年(昭和 25 年)から 1970 年(昭和 45 年)にかけて人口の減少が見られましたが、1970 年(昭和 45 年)以降は増加に転じ、2005 年(平成 17 年)の約 9,500 人をピークに再び人口減少の局面を迎えました。5 年前の推計値と比べると減少はやや緩やかになると見込まれますが、2050 年(令和 32 年)には、1970 年(昭和 45 年)の水準まで落ち込むことが予想され、2060 年(令和 42 年)には、ピーク時と比べて4割程度人口が減少して 5,500 人程になると推計されます。



イ 年齢3区分別人口の推移と将来推計

① 年少人口

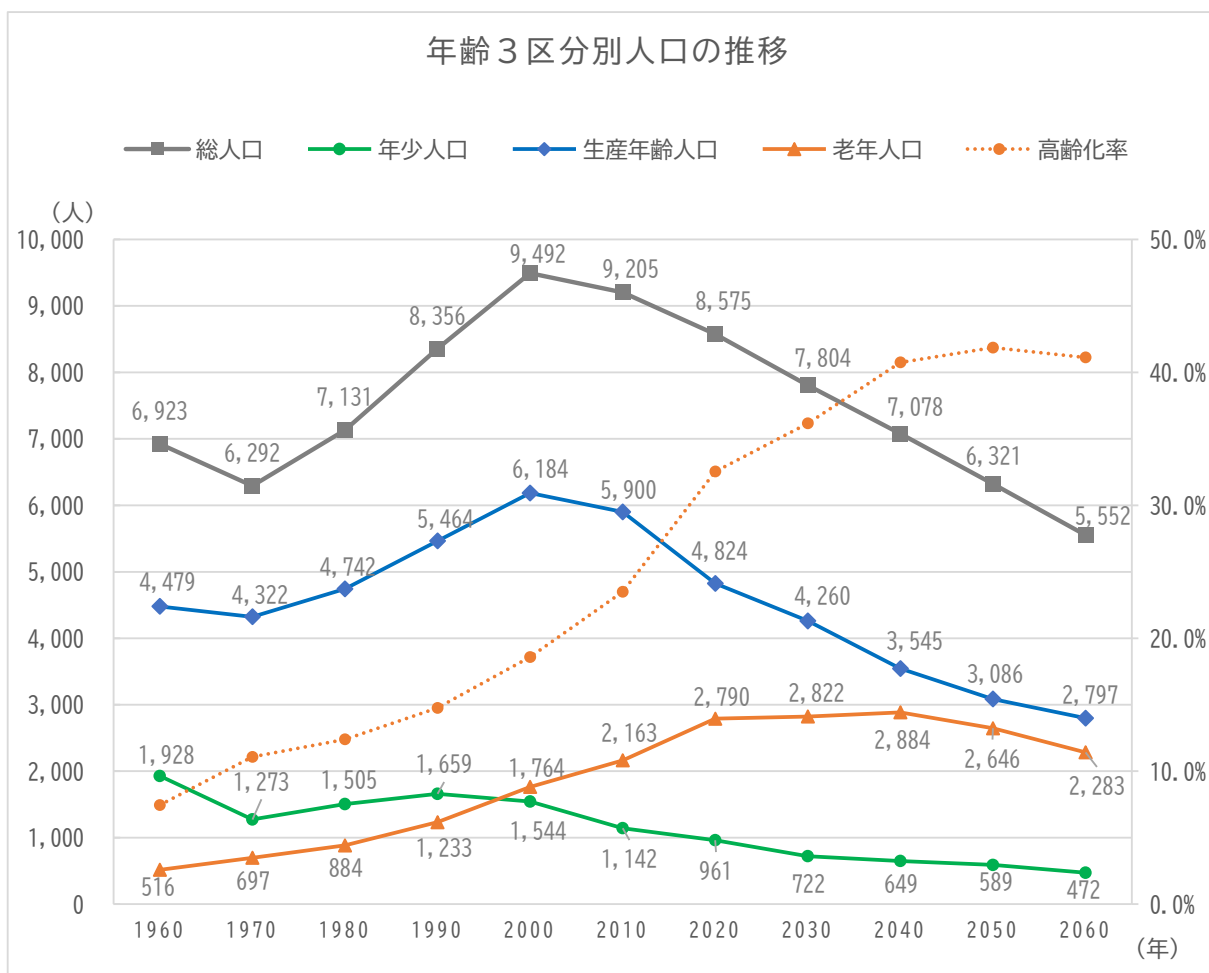
1970年(昭和45年)から1990年(平成2年)まで増加しましたが、その後は減少に転じ、2020年には1,000人を下回り、20年前と比べて3分の2まで減少しました。今後も減少し続け、2060年(令和42年)には500人を下回ると予想されています。

② 生産年齢人口

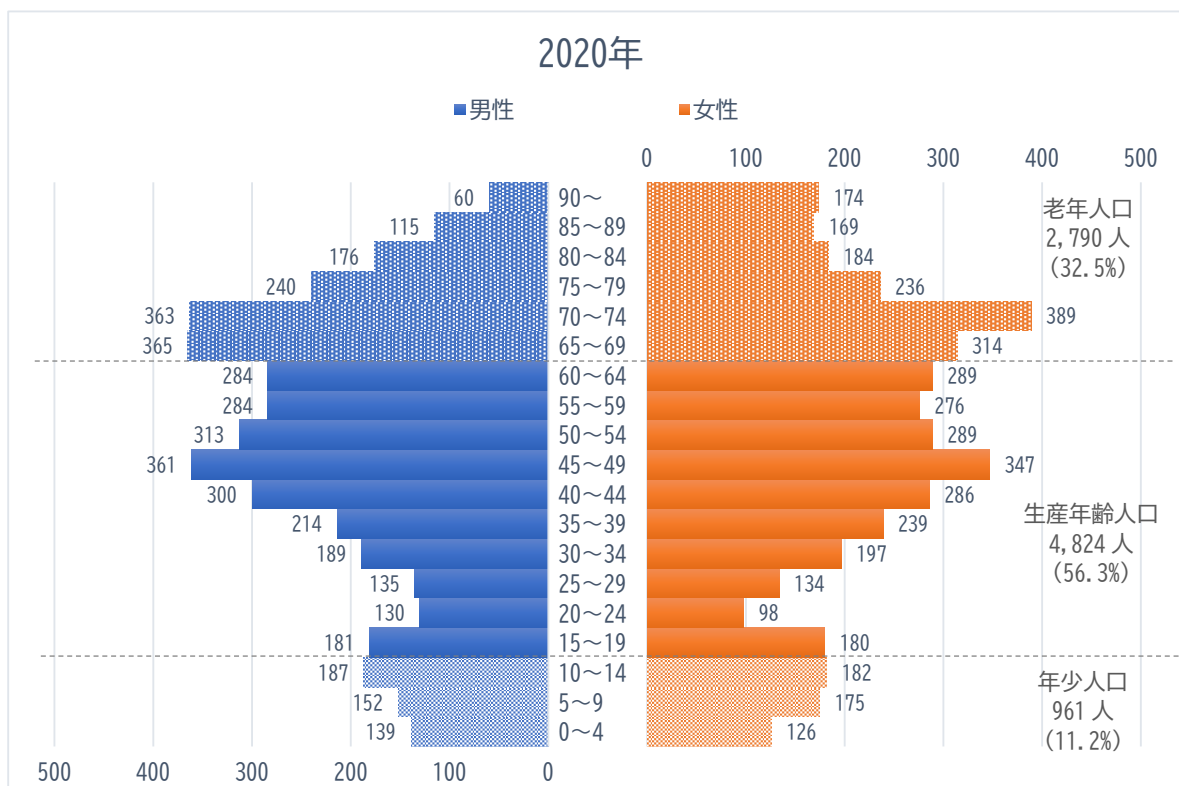
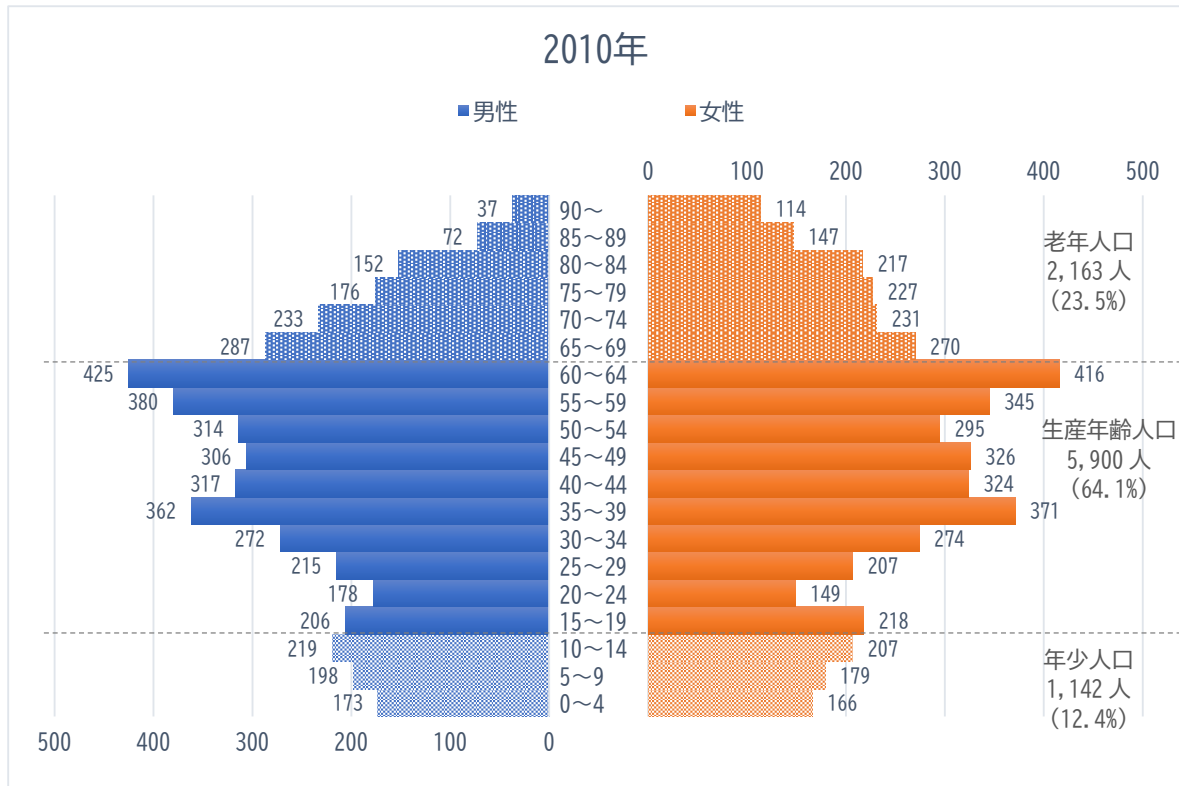
総人口のグラフと、ほぼ同じ曲線で推移し、2000年(平成12年)の6,184人をピークに減少局面を迎えました。2020年時点でピーク時と比べて2割以上減少し、地域社会の担い手の減少が大きな課題となっています。今後も減少し続け、2050年(令和32年)にはピーク時と比べて半減すると見込まれています。

③ 老年人口

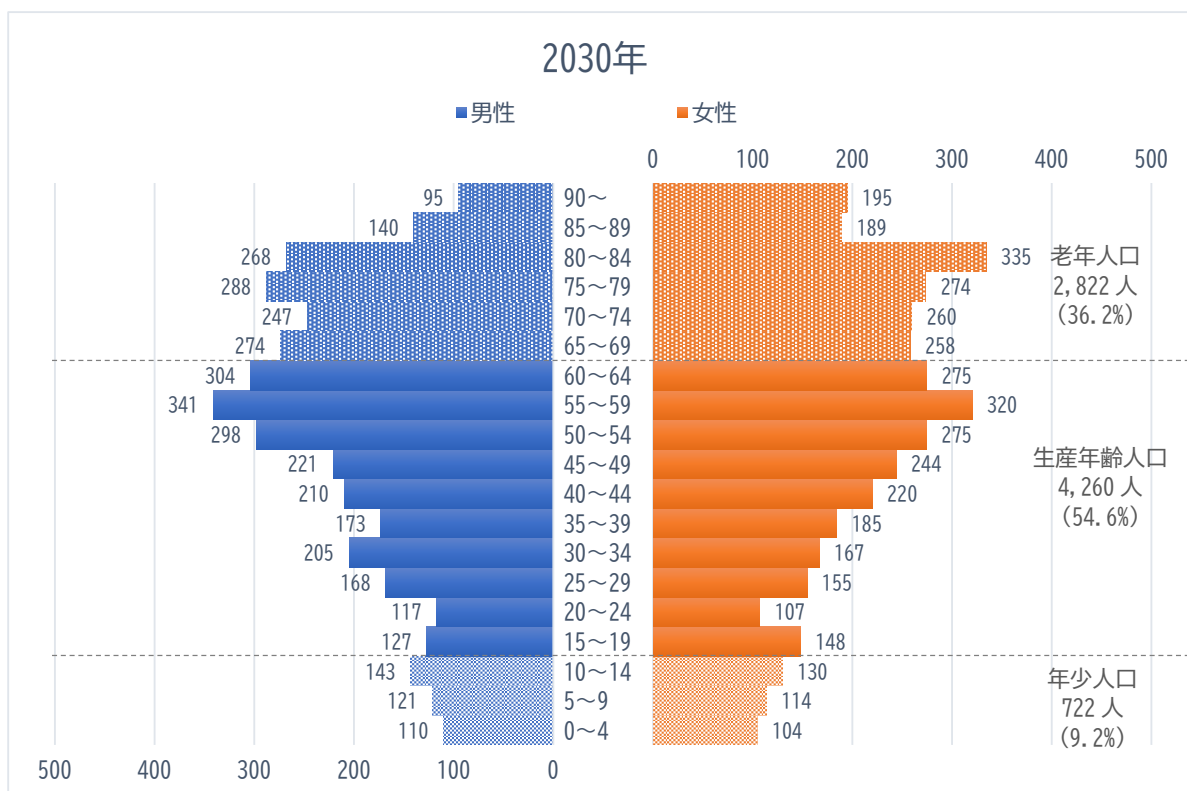
2030年(令和12年)頃まで増加し続け、その後横ばいから減少に転じると推測されています。この30年間で2倍以上になり、シニアの活躍が欠かせない時代を迎えています。高齢化率は2050年(令和32年)の約42%をピークに減少していくと推測されています。



ウ 人口ピラミッドの変化



出典：国勢調査、社人研

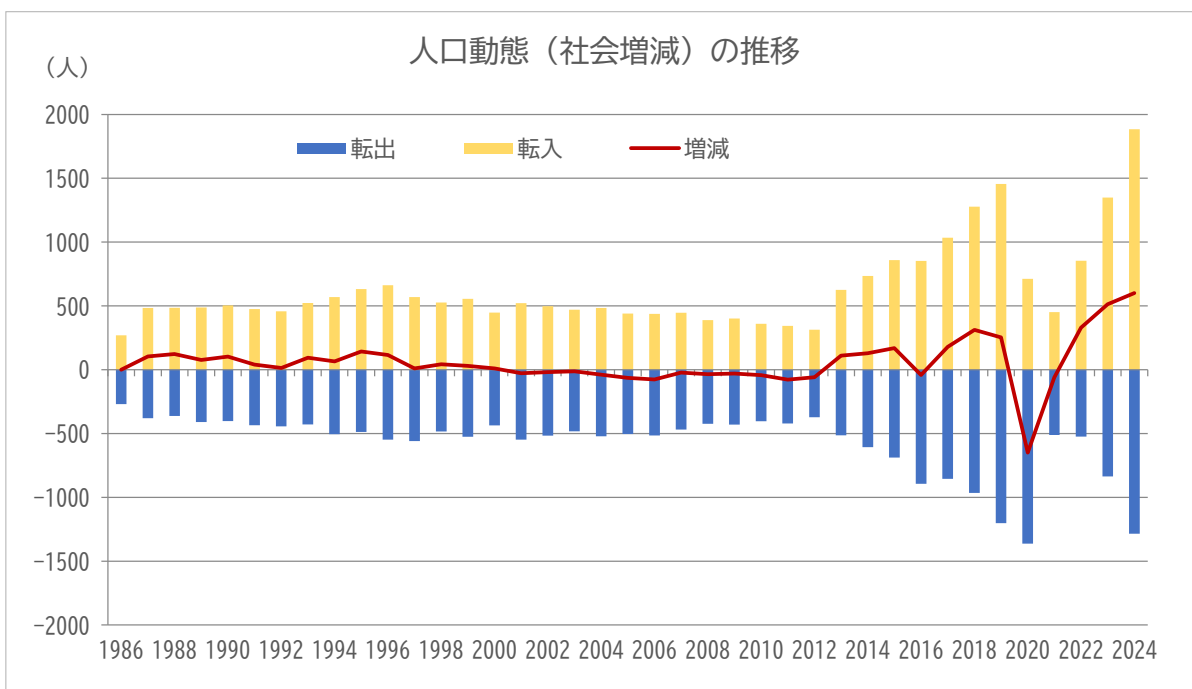
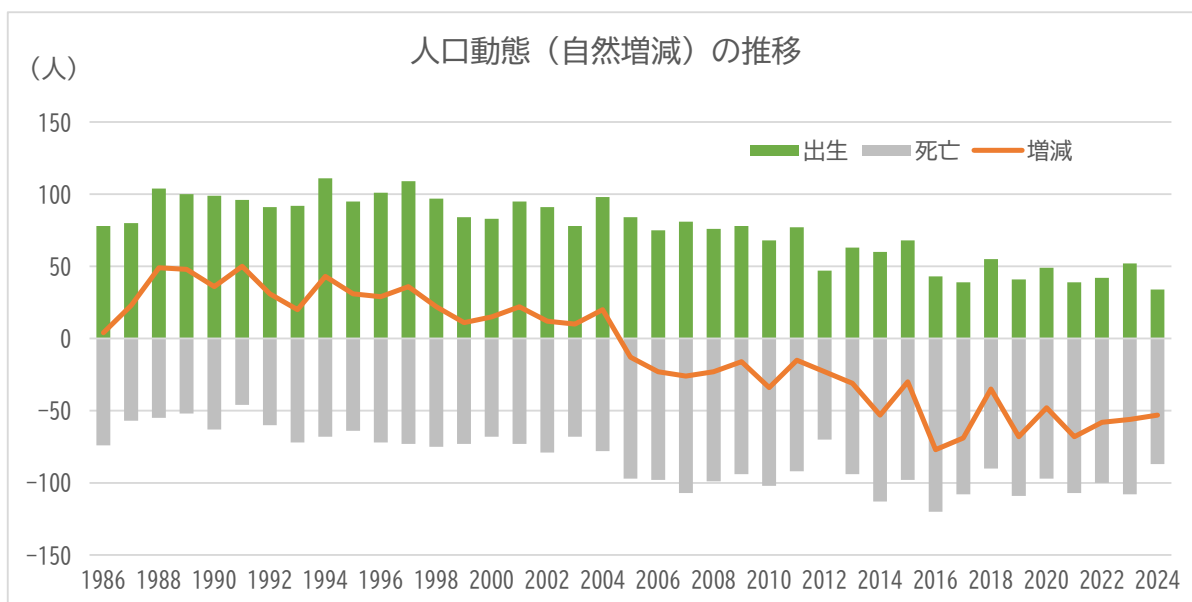


出典：国勢調査、社人研

エ 出生、死亡、転入及び転出数の推移

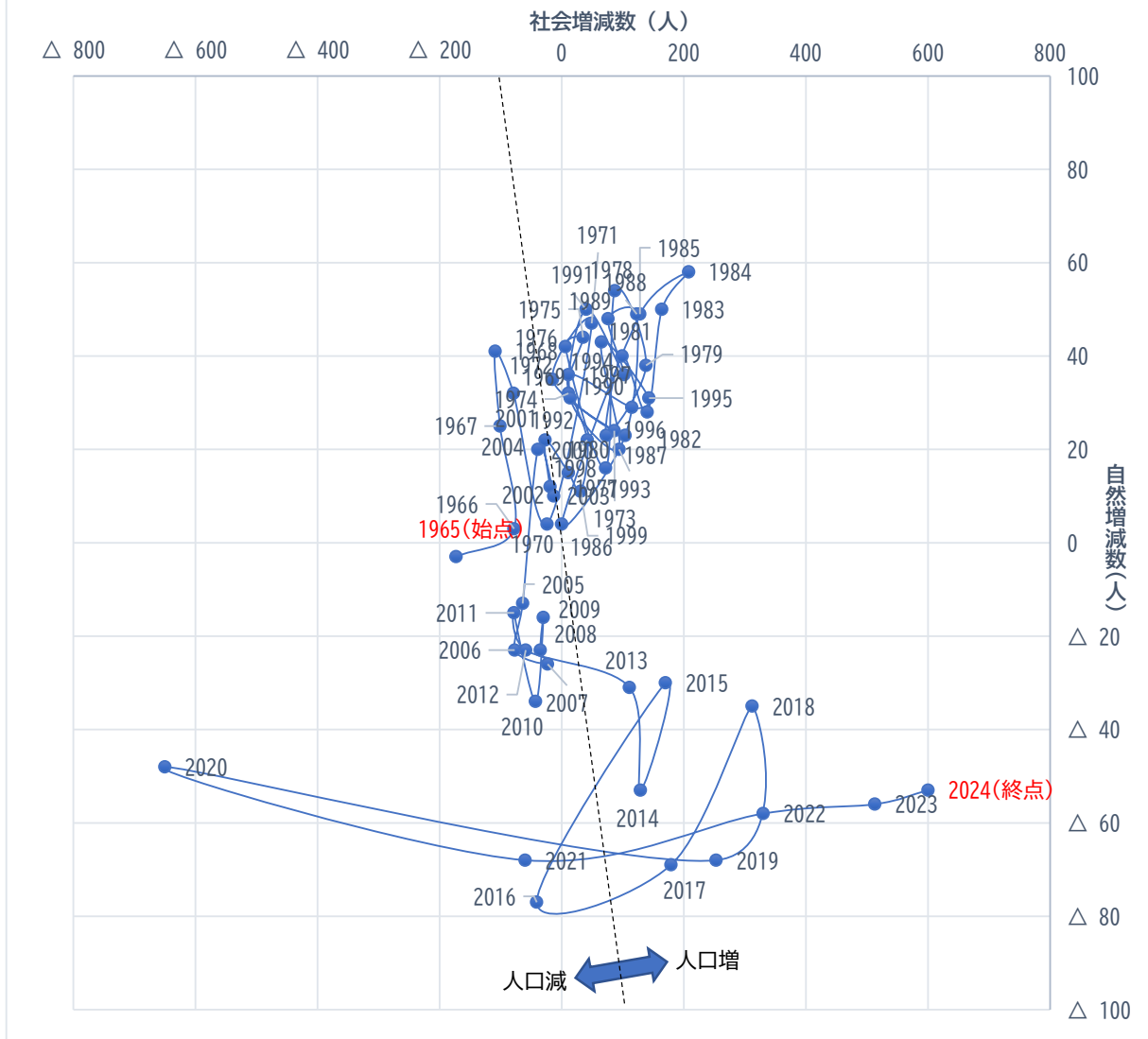
自然増減では、1986 年(昭和 61 年)以降、出生数が死亡数を上回る増加基調が続いてきましたが、2005 年に初めて死亡数が出生数を上回り自然減に転じることとなり、その後もその傾向が続いています。

社会増減では、2000 年(平成 12 年)まで転入数が転出数を上回っていましたが、2001 年に転出超過に転じました。2013 年(平成 25 年)以降、冬季の短期就労者として滞在する外国人が増加し、転入者・転出者が増加していますが、コロナ禍を除いて概ね社会増(転入超過)となっています。



出典：白馬村人口動態

自然増減と社会増減の影響



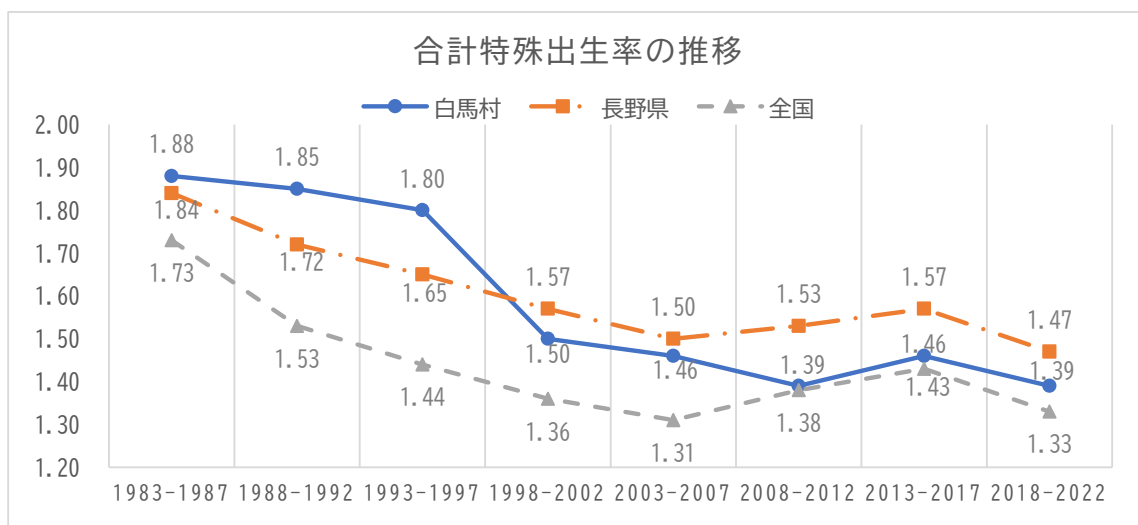
オ 合計特殊出生率の推移

合計特殊出生率は全国的に減少傾向にあり、白馬村は全国平均を上回っているものの、長野県内では7番目に低い値となっています。

全国的にも白馬村でも、2015 年前後までは一度増加に転じたものの、再び減少し、史上最低の水準となっています。

※合計特殊出生率

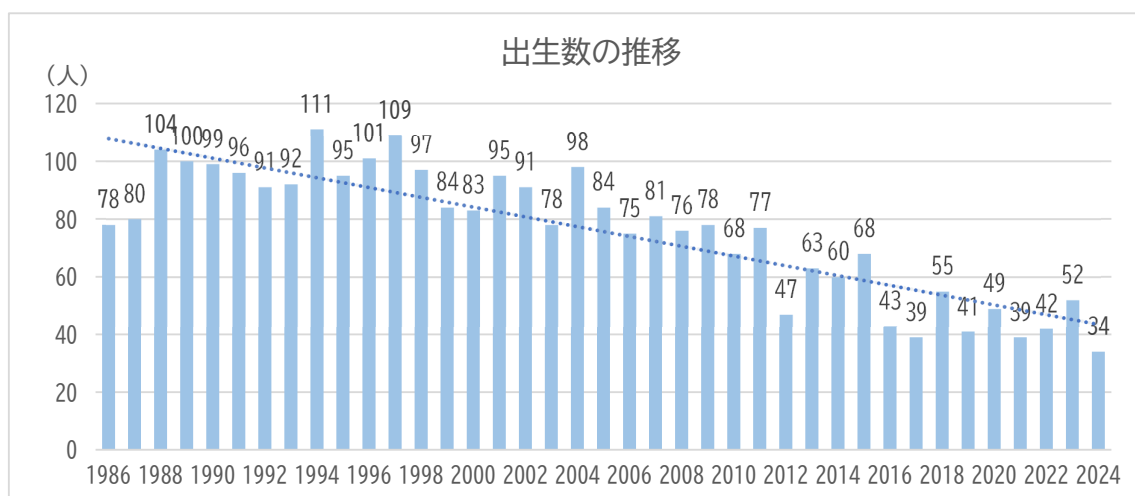
15 歳から 49 歳までの女性の年齢別（年齢階級別）出生率を合計したもので、一人の女性が一生に産む子どもの平均数を示したものです。人口動態の出生の動向を見るとき重要な指標となっています。



出典：厚生労働省人口動態統計

カ 出生数の推移

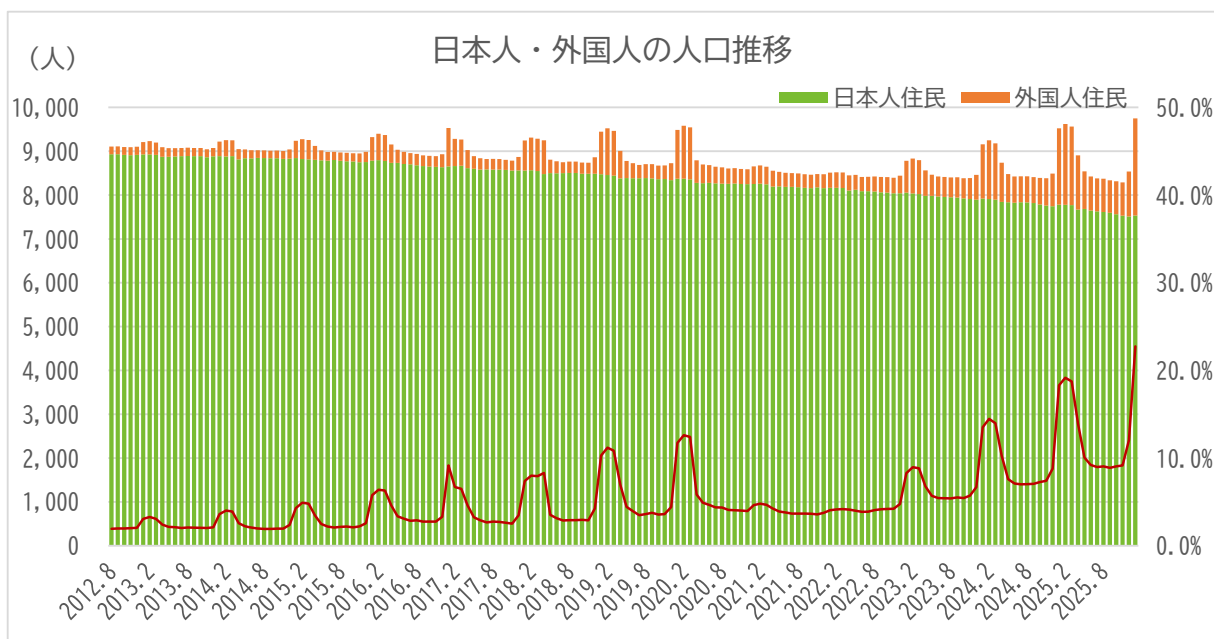
出生数は年々減少傾向にあり、1994(平成6年)には111人でしたが、2024年(令和6年)には34人と最小値を更新しました。年により増減はあるものの、30年間で約70%減少しています。



出典：白馬村

キ 外国人人口の推移

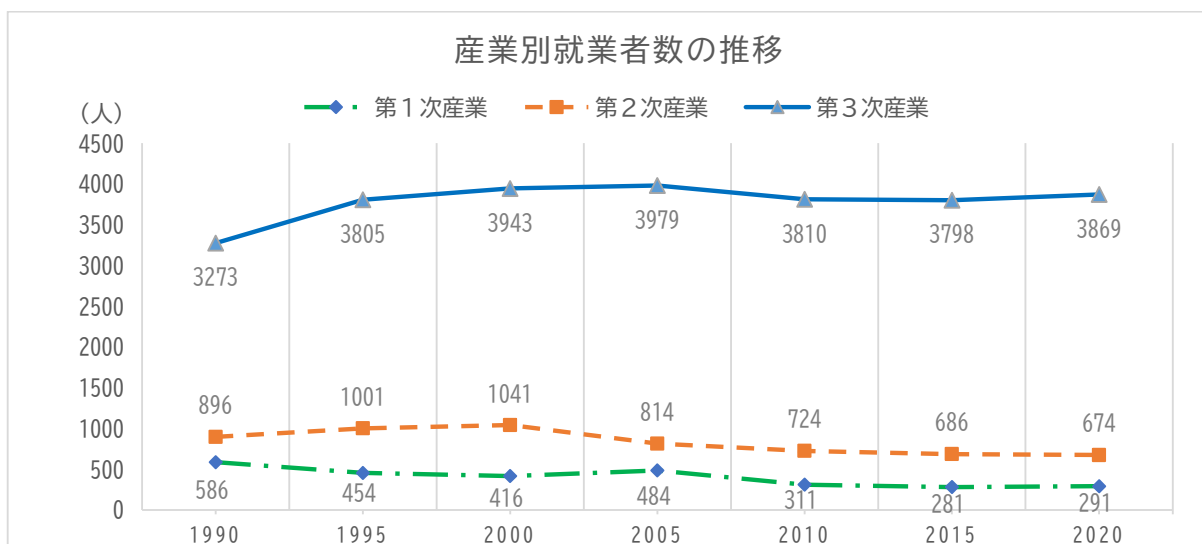
外国人住民は、通年定住者も冬季の短期就労者も増加傾向にあり、春から秋にかけては人口の10%、冬季は人口の20%まで増加しています。定住する外国人はこの10年間で約4倍に増えた一方で、日本人は減少の一途を辿っています。全体的な人口は、グリーンシーズンは微減で、冬季は増加傾向にあります。



出典：白馬村

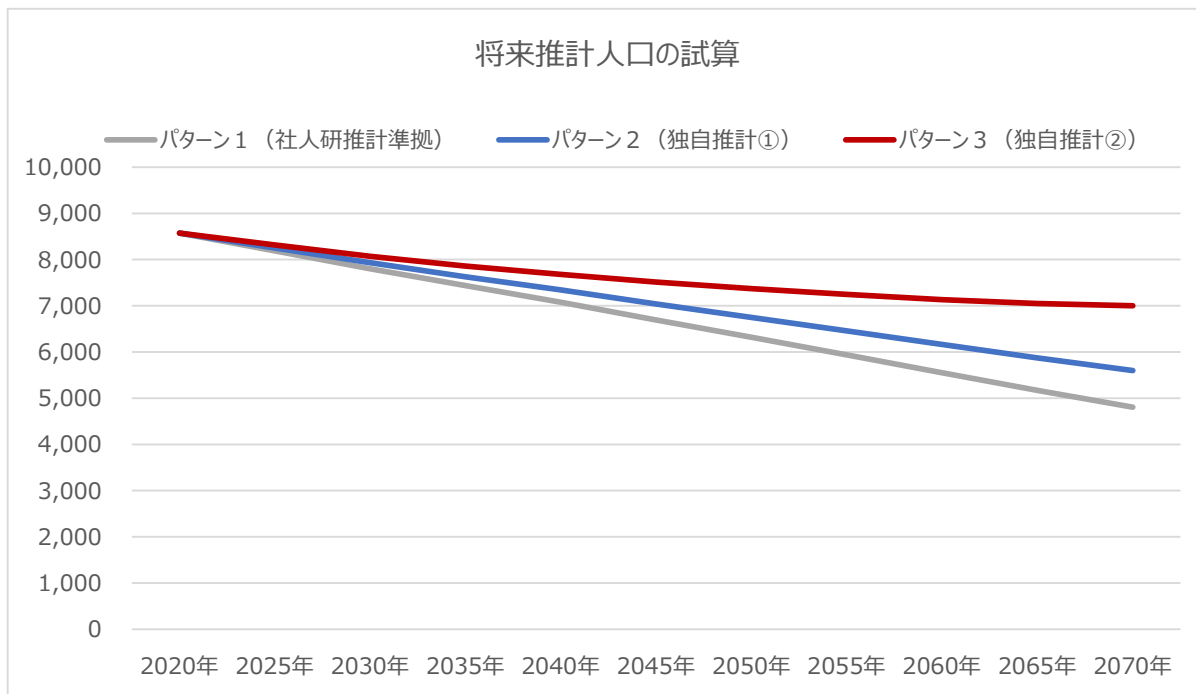
ク 産業別就業者数

第1次産業の就業者が減少し、第3次産業の就業者数が増加する傾向にありましたが、近年はほぼ横ばいとなっています。グラフは10月1日を基準日とする国勢調査の数値であり、冬季には第3次産業の就業者がさらに多くなります。



3. 将来の目標人口

(1) 長期的な人口推移の試算



■ パターン1(社人研推計)

国立社会保障・人口問題研究所の将来人口の推計。人口変動要因である出生、死亡、人口移動について、それぞれの要因に関する実績統計に基づいた人口統計学的な投影手法によって男女年齢別に仮定を設け、将来の人口を推計している。

■ パターン2(独自推計①)

パターン1に「子育て世代の転入」を戦略的に上乗せする。(25～40歳及び0歳～15歳の純移動数を年間12人増加)

■ パターン3(独自推計②)

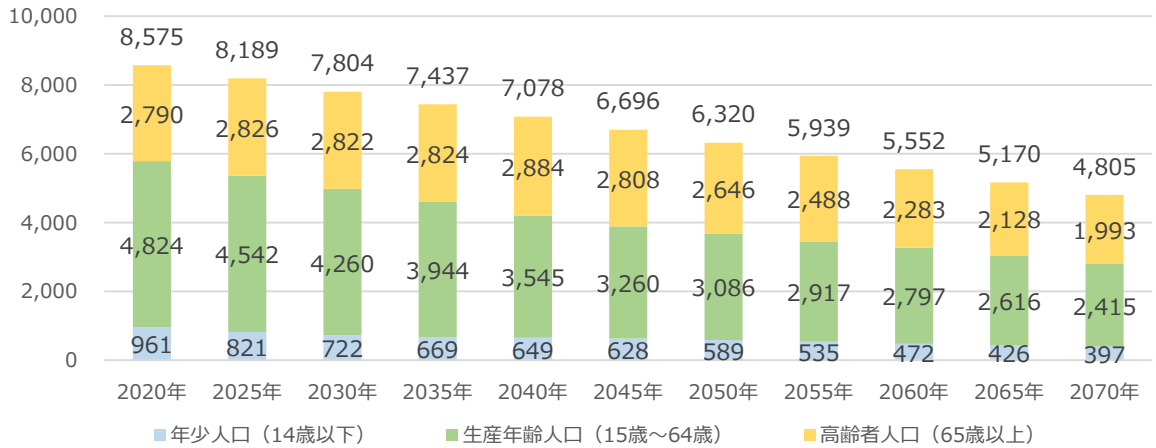
パターン1の出生率を、2020年の1.3から5年ごとに0.1ずつ上昇させ、2050年には長野県民希望出生率1.8の実現、2065年には人口置換水準の2.07の実現を目指す。

さらに、「子育て世代の転入」を戦略的に上乗せする。(25～40歳及び0歳～15歳の純移動数を年間24人増加)

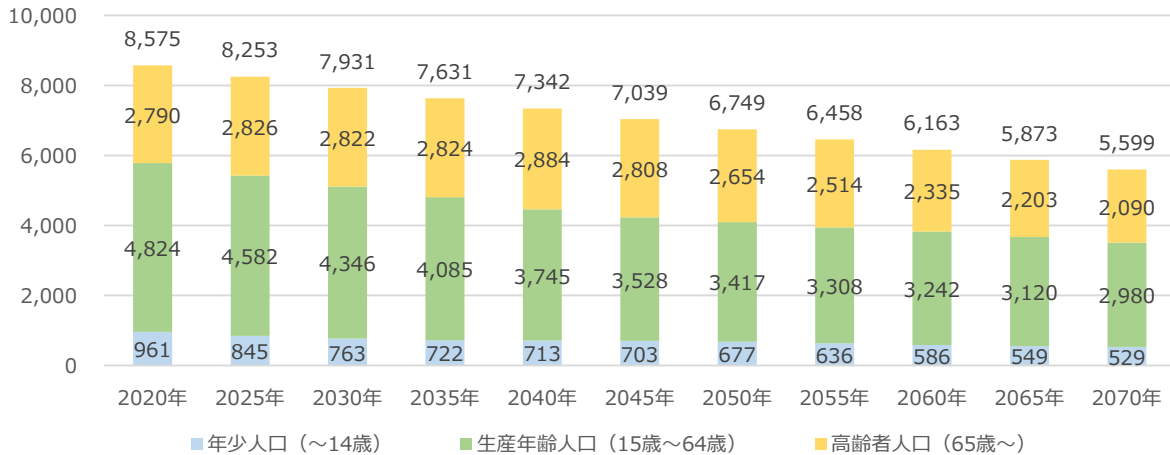
【参考】

- ・ 国の人口ビジョンの出生率目標値:2030年までに1.8程度、2040年までに2.07程度。
- ・ 長野県の人口ビジョンの出生率目標値:2040年頃に1.6、2050年頃に1.8、2060年までに2.07。

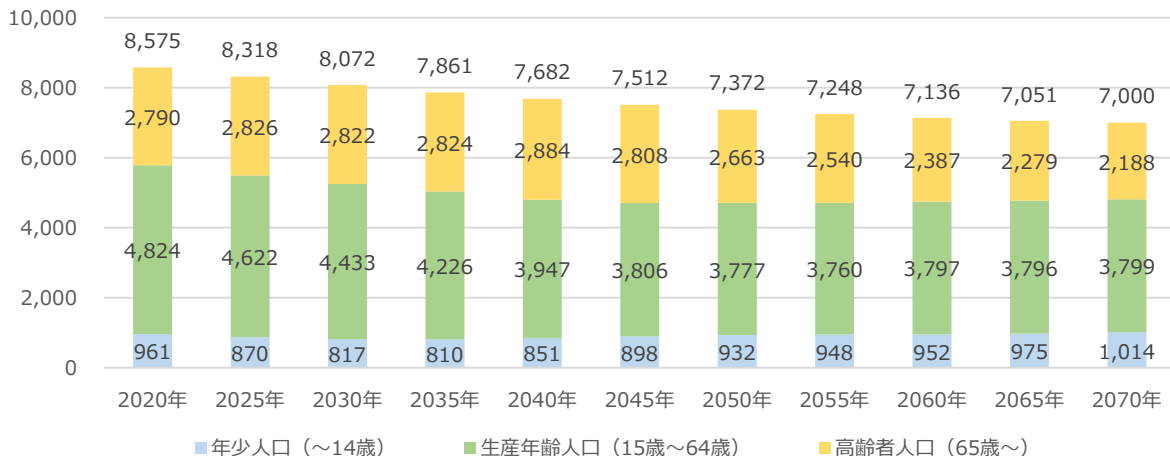
パターン1（社人研推計）



パターン2（独自集計①）



パターン3（独自集計②）



(2) 人口の将来展望と対策の方針

目標：2070年に定住人口7,000人規模で人口を定常化する

全国的に人口減少・少子高齢社会を迎える中、本村においては国内外からの移住者が多い状況にあるものの、出生数の減少が続く、定住人口は微減の状況が続いています。

持続可能で地域社会を実現するためにも、地域経済や医療・福祉体制の維持、安定的なインフラ整備と行財政運営、地域産業や地域活動の担い手確保、学校教育やスポーツ・文化活動等の機会や選択肢の充実など、様々な視点で「人口減少を最低限に抑える」ことが求められます。

デジタル技術の活用による効率化や関係人口による支援等により、人口減少による損失を補完できる要素も考えられることから、定住人口の一定程度の減少を受け入れつつ、長期的に7,000人程度を維持することを目指します。

目標を実現するために、現状の社会増を基準としながら、以下の施策を重点的に実施することで、地域の産業や活動の担い手となる若年層の定住・転入を促進・誘導し、年少人口及び生産年齢人口を確保するとともに、出生率の向上を図ります。

- ・ 官民連携による住宅の確保・整備
- ・ 子育て世代・エッセンシャルワーカー等に対する移住・定住の補助
- ・ 子育て支援と教育環境の整備・充実